

こくはくだいこうぶ

かつどうちゅう

告白代行部、ただいま活動中!②

いしだそら
石田 空・作

あさか
朝香のりこ・絵



アルファポリスきずな文庫

目次



プロlogue

修学旅行係のゆううつ

006

第一話
だい
一
わ

だれかがだれかを好きになるとき
しゃくがぐりよじう

020

第二話
だい
二
わ

修学旅行は京都行き
しゅがくりょこう

076



第三話
だい
三
わ

好きって言葉じゃや許せない
すきってことばをゆきせない

144

Hピローグ

ハロウィンパーティー！

191

あとがき

210



とう じょう じん ぶつ しょう かい

登場人物紹介



江藤花音

さくらの幼なじみの文学少女。
さくらの代行部ではラブレターの
代筆をつとめる。

更科莉子

ビビッドでへたれな小学生。
押しに弱くて、ことわったり、
自分の意見を主張するのが苦手。

告田代行部の部長。
製薬会社のCEOの娘で、
学校の有名人。

橘川芽衣

おかしおりが趣味の
マイペース女子。
ちゅうぶりミーーー。

若王子颶馬

莉子の幼なじみで、彼氏。
サッカー部に入っていて、
他クラスの子からモテる。

佐賀見健

芽衣のことが好きな
コワモテ男子。

周防穂

京都に住む
花音の婚約者。

渡辺雅人

莉子と同じクラスの
体育会系男子。

莉子と同じクラスの
文学系女子。

高山萤

プロローグ 修学旅行係のゆううつ

「それでは、投票の結果、修学旅行係は更科さんと渡辺くんに決まりました」

今まで特に目立つことはしていなかつたから、私になにか大きな当番が回つてくること

はなかつた。でも、二期に入つて早々に目立つてしまつたから、今日の係を決める投票で、

面白半分に票を入れられちゃつたんだ。

先生に「それじやあ、更科と渡辺、前に出て」と言われた。ただでさえ教壇の前に立つのは緊張するのに、これからは修学旅行までずつとこんなことが続くのかと思うと、げんなりする。

渡辺くんとは、席順の関係でときどき掃除当番がいつしょになる程度の仲だつた。ものすご

く仲がいい訳じゃないけれど、特に険悪でもない。

身長は可もなく不可もなく。髪型も本当によく見る短く切りそろえた髪だ。ただこざつぱり

している雰囲気のせいか、アイドルみたいにさわがれはしないけれど、男女ともに友だちが多い。サッカー部員じやないけど、一番仲がいいのはサッカー部みたい。

「ええつと、修学旅行がんばりましょう！」

渡辺くんのいい加減で脑天気な言葉で、とたんに教室は笑いに包まれた。お調子者つて訳ではないんだけど、ムードメーカーつていうか渡辺くんがしゃべるといい感じに空気が入れ替わる。

でも、私は気の利いた言葉は言えないし。ええつと、ええつと……

「よ、ろしく、お願ひしますっ」

私はそう言って頭を大きく下げる。

渡辺くんが空気を温めてくれたおかげか、しらけることはなく、そのまま席に着けた。自分の席に戻る際、私のほうを見る視線とぶつかつた。若王子くんが頬杖をついて私を見ていたんだ。

「で、パクパクと『がんばれよ』と言われているのに気付い、私は大きくなっていた。見た目ふつう、成績ふつう、運動神経ちよつと悪い……。そんな私がつい目立つてしまつた理由。それが転じて、みんなから一齊に係の票を入れられてしまつたその訳は。

うちの学年でも評判の、難攻不落なサッカー少年の若王子颶馬くんと私がお付き合いをはじめたことが、うつかり校内に漏れてしまつたからだつた。

うちの学校は初等部から高等部までをくつつけた訳のわからないくらい大きな学校で、大きすぎるせいか、あんまり知られてないような教室や部活が存在する。

私が、更科莉子がうつかりと若王子くんとお付き合いをはじめるようになつたきつかけの、告白代行部もそのひとつだ。

告白代行部。名前のとおり、告白したい相手に對して代わりに告白をしてくれる部活動があるんだ。

私が若王子くんに告白するきつかけをくれたその部には、いろんな子が相談にやつてくる。学年が離れているせいで音信不通になつてしまつた相手がいたり。突然云能界デビューしてしまつたために連絡手段が一切なくなつてしまつたり。時にはがつしりした見た目を怖がられたくない一心で、告白代行部に相談にやつてくる人

だつている。

私はいつものよう中等部校舎の階段を下りて、地下部室棟を眺めた。

まだ金木犀の季節には早いけれど、気のせいか金木犀のいい匂いがただよつていた。

「ここにちはー」

そう言いながら扉を開けると、ふつうの教室が広がつている。ここが告白代行部の部室だ。

「あら莉子さん、いらっしゃい」

そう最初に声をかけてくれたのは、立神さくらさん。

黒くて長い髪がほつれることもなく、彼女の背筋といつしょにしyanと伸びてゐる姿は格好いい。有名製薬会社のCEOの娘だつたり、高校生の婚約者がいたりと、いろんなオプションがたくさん付いている彼女が、告白代行部の部長だ。

私は空いている席に座ると、カバンを下ろした。

「ひどいんですよ。私、今日の学級会で修学旅行係になつちゃつたんです」

「あれ？ あれつて投票で決まるんじやなかつた？」

そう私に声をかけてきたのは、いつもクールな江藤花音さんだ。ポーカーフェイスで占いが得意だつたり、文学少女だつたり、きれいな字でラブレターの代筆をしたりしている彼女は、

さくらさんの幼なじみだつたりする。

私は花音さんにうなずいた。

「……若王子くんと付き合つてていることが、クラス中にバレちゃつたんです……たまたまいつしょに学校帰りに公園でしゃべつてたのを見られちゃつたみたいで」

「あら災難。でも隠してないならいいじやない」

「隠すつもりはなかつたんですけど、ややこしいじやないですか……」

私はそう言いながら、ゴーロゴーロと机の上で頭を転がす。

ひんやりとした机の感触が気持ちいい。

私が若王子くんに告白する経緯は、ちよつとややしかつた。

そのときには、告白代行部のみんなに会わなかつたら、私はもつとずっとヘタレなまま、まともに告白することもできずに、ひとりでうじうじする日々を過ごしていただろう。そう考へると、

よかつたような悪かつたような。

そうしてると、「まあまあ」という声とともに、ひよいとお茶がさし出された。ふんわりとした香りは金木犀だけれど、それだけじゃなくちよつと苦いも混ざつていてる。

お茶を出してくれたのは橘川芽衣さん。とにかくかわいい人で、とことんマイペース。おか



しづくりが得意で、いつも私たちにおかしとお茶をふるまつてくれる。

「あのう……これは？」

「やつと涼しくなつたからねえ、フレーバーティー。アメリカンスコーンといつしょに食べるといいしいよ」

そう言いながら勧めてくれたのは、二角型の生地にぎつちりとチヨコチップを詰め込んだアメリカンスコーンだ。ひと口食べるとサクッとした食感にチヨコチップのほろ苦くて甘い味が後を追う。金木犀の香りのフレーバーティーの程よい苦みとマッチして本当においしい。

「ありがとうございます……ちょっと元気出ました」「人気者と付き合いはじめた弊害だねえ……若王子くんといつしょにいることで目立つちゃつたんだ？」

「まあ、そうですねえ……」

サクッ、ホロッとした食感を楽しみつつも、私はなんとも言えない顔になつた。私がお付き合いをはじめることになつた若王子くんはサッカー少年で、同年代の中でも高めの身長や格好いい見た目のせいで、彼の不愛格を知らない人からはやけに人気だつた。そんな高嶺の花状態だつた若王子くんと、平凡な私が付き合い出すとなつたら、当然悪目立つ

ちしちやうんだ。

私は「うーん……」とうなりながら、またサクッとアメリカンスコーンをかじる。

「私のせいで、若王子くんに迷惑がかからないといいんですけど」

そうボソリとつぶやいたら、三人とも顔を見合はせてしまつた……あれ？

「……莉子さん。あなた、それはいくらなんでもないと思うのよ」

三人を代表して、おずおずとさくらさんが声をかけてきた。それに私はますます「あれ？」と首をかしげた。

「ええつと……私、また変なこと言いましたつけ？」

「変ではないけど、莉子はもうちょっと自己評価上げたほうがいい」

ボソッと花音さんからもツッコまれ、私は助けを求めるように芽衣さんに振り返つた。すると芽衣さんはこやかに言い切つた。

「莉子ちゃん莉子ちゃん。ふつうに若王子くんのせいで巻き込まれただけなのに、自分のせ

いつて勝手に負い目を感じるのはよくないと思うよ？若王子くんたつて巻き込んだつて負い目を感じてるかもしれないから、あんまりなんでもかんでも自分のせいだつて思うのはよくな

いよ」

「ええ……そんな風に思つたことなんて……」

「いや、むしろ、若王子くんにこのことはちゃんとグチを言つてもいいと思つけど。なんでもかんでも自分のせいで終わらせたら、若王子くんたつてかわいそだから」

さくらさんにまでツッコまれ、私は「ええ……」と思わずつぶやいた。

私がらしてみれば、これ以上若王子くんをいじめないでほしかつた。

勝手な思い込みで自分を褒めた口でおとしめてくるんだから、本当にどうすればいいんだつて思つちゃうよね。私たつて考へてしまふやうの。

若王子くんは、勝手に自分を持ち上げた子たちからざんざん落とされてきた子だから、私は

で責める側に回るのはよくない気がする。

私は「うーんうーんうーん」と考へてから、みんなに答えた。

「今まで若王子くんを責める側には回りたくないですよ。目立つからつて若王子くんをすぐ話題にするのはよくない」

そう言つたら、花音さんはアメリカンスコーンをひと口かじつてから、ボソリと言つた。

「莉子はそのまんまでいてね」

それにさくらさんも芽衣さんも大きくうなずくのだから、私は訳がわからぬまま、アメリ

カансスコーンを頬張つた。

告白代行部は、基本的に卒業生たちからの口コミ頼りで、大きく宣伝していな。

若王子くんが私と付き合つたから、わからず若王子くんが私と付き合つたみたに、人の恋路をおもちゃにしてしまう人つて、けつこう多い。だから、まじめに告白した人たちに迷惑かからな

いように、本当に困つた人たちにだけ届くようになつてゐる。

そのため、部活に相談者がやつてくるのは週に一度あれば多いほう、なにかしらイベントごとが近付いたらもうちょっと増えるくらいで、それ以外は芽衣さんの手づくりおかしを食べてのんびりしている。

二学期になつたらイベントが多い。

私が係になつてしまつた修学旅行もそだけど、その前には体育祭がある。

「そういえば、体育祭はどんな種目に出るかもう決めましたか？」

私がなんとはなしに話題にしてみると、芽衣さんは「うーん」と困つた顔をした。

私がなんとはなしに話題にしてみると、芽衣さんは「うーん」と困つた顔をした。

私がなんとはなしに話題にしてみると、芽衣さんは「うーん」と困つた顔をした。

私がなんとはなしに話題にしてみると、芽衣さんは「うーん」と困つた顔をした。

「人気だからいつも競争になるでしよう？ 借り物競走は完全に運だし」

「ですよねえ……」

「そうね、運動が苦手な子はそうかもね」

さくらさんはのんびりと答えてからフレーバーティーをすすつていて。

「さくらさんはどうなんですか？」

「わたくし 私？ たぶんリレーの選手を頼まれるんじゃないかと」

「わあ！」

さくらさんはとにかくハイスペックだ。それで嫌味に感じるのは、さくらさんがあまりに堂々としているからだろう。

「すごいですねえ」

私が素直に言うと、さくらさんはあつさりと「ありがとうございます」と答えた。

そんな中、ふだんだつたらなにかとクールなひと言を漏らしそうな花音さんは、知らん顔で本を読んでいる。

いつもはみんなで雑談しているときは読書しないからめずらしい。元々は文芸部に入部希望だつたけど、なかつたから告白代行部に来たらしいから、しかたないかもだけれど。

花音さんにも話題を振つたほうがいいかな。

私がどう言えばいいかなと頭でこねくり回していたら、「こちら花音」とさくらさんが本を取

り上げにかかつていて。

「人の話しているところで本を読みはじめるのは行儀悪いでしよう？」

「……だつて」

さくらさんと花音さんはとにかく仲がいい。でもいつもさくらさんがあれこれと指示を飛ばして、素直に花音さんが話を聞いているのばかり見ていたから、こうも反抗的な花音さんは初めて見たかも。

花音さんはそつぽを向いて、ボソボソとつぶやいた。

「……秋はゆううつなんだもの」

「あれ、花音さん。秋がキレイなんですか？」

思わず疑問を口にしたら、花音さんはばつが悪そうにうなずいた。
「金木犀は好き。コスモスも好き。秋の季節自体は好きだけど……今年の秋はキレイ」

私は意味がわからず、目をパチパチとさせて、助けを求めて芽衣さんのほうを向いた。ふだんから告白代行部のムードメーカーをしている芽衣さんだけれど、彼女も花音さんの言葉の意味がわからなかつたらしく、困つたようにツインテールを揺らしている。

「ええつと……」めんね。もしかして体育祭とか、修学旅行がイヤつてことなのかな？」

それに私は「えつ？」と声を上げた。

体育祭がイヤというのはまだわかる。運動部以外の子たちは、私も含めてどうやって風邪引いてサボるかばかり考えちゃうイベントだから。

でも、修学旅行に行きたくないつて気持ちは全然わからなかつた。私も自身、修学旅行係に選ばれてしまつて、たくさんの厄介事を抱え込みそうになつているけれど、修学旅行 자체は楽しみにしているからだ。

花音さんはだんまりを決め込んでしまつて、それ以上はなにも言つてくれなかつた。それにさくらさんはため息をついた。

「もう、花音つたら……ごめんなさいね。この子もいろいろ思うところがあるみたいだからどうもさくらさんは、花音さんが修学旅行のなにをそこまでイヤがつてているのか知つていてみたいだつた。

芽衣さんは「花音ちゃん」とのんびりと名前を呼んだ。

「なにか言いたくなつたら声かけてね。なんでもできる訳じゃないけれど、話を聞くくらいだつたらできるからね」

「うん……ありがとう。こつちこそごめん。空気を悪くして」

花音さんがボソボソと返事をするのを聞いて、私も思わず「あのつ」と声を上げさせる。
「私も、全然頼りにならないんですけど、話を聞くくらいだつたらできますから」
そう言い切ると、花音さんはキヨトンとした顔をしたあと、こつくりとうなずいた。
「うん、莉子もありがとう。でも修学旅行中は係で大変でしよう? こつちに気をつかわなくつてもいいから」

その言葉に私は内心「あれ?」となつていた。

まるで花音さんにとつてのイヤなことは、修学旅行中におこるような口ぶりだつた。
うちの学校では修学旅行で毎年京都に行つてゐる。京都は観光名所が多くつて、歴史の教科書で習つた場所が今も残つてゐるという印象なんだけど……

京都に行くのがイヤなのかな?

考えてみたけれどらちが明かず、私は「はい」とだけ答えた。

二学期に入つたらイベント自白押しで、もしかしたらイベントにかこつけて告白代行の相談もやつてくるかもしねれない。
私はそんな予感を胸に、今日の部活を終わらせたんだ。

第一話 だれかがだれかを好きになるとき

修学旅行係の役割は修学旅行のしおりづくりと、それぞれの班決め、先生からの連絡をみんなに伝えることだ。

寝るときは男女別に大きな部屋で分かれるから、部屋割りは心配ない。

問題は班決め。班を決めたら、修学旅行の予定ルートを修学旅行係に報告してから先生に伝えた。

えないといけないから、大変だ。

せつかくの修学旅行を、ギスギスしている班で回る訳にはいかない。だからと言つて仲良しがグループでそのまんま班をつくると、人数が多すぎて困るから、修学旅行係が調整する必要があるんだ。

どうしてこんな胃に穴が空きそうな係が存在していて、それを私たちに押しつけるんだろう。

ホワイトボードにさらさらと班とメンバーを書いていく。

「そういえば、更科さんは若王子と最近付き合いはじめたんだつけ？」

じやんけんで班決めするのを見守つている間、いつしょにホワイトボードに書き込みをしていた渡辺くんが声をかけてきた。それに私はピクッと肩を震わせ、持つていたペンを取り落としてしまつた。

渡辺くんは笑いながら「ごめんごめん、続けて」とペンを拾つてうながしてくれた。渡辺くんは若王子くんとも友だちだし、若王子くんの気難しい部分も知つているから変なことは言わないとは思う。

私はそう考えてからうなずいた。

「うん、付き合つててるよ」

「それだけさあ、たしか告白代行部つていう部を利用したんだつけ？ 前に立神さんを見かけたことがあるからさ」

「あー……」

私が告白代行部に依頼したとき、さくらさんがうちの教室にまで様子を見に来たことがある。

さくらさんは有名人らしくつて、渡辺くんも知つていたようだ。

若王子くんもあれこれと言ふらす子ではないけれど、友だちには告白代行部の話をしているてもおかしくないだろう。私は「うん」とうなずいた。

なにを聞きたいんだろう？ 私と渡辺くんは
いつしょに修学旅行係に選ばれた以外だと、同じ
じクラスで、共通の知人に若王子くんがいるく
らいしか接点がないんだけれど。
私は唐突な話題に首をひねった。

「なんでこんなにじやんけん終わらないの!?」

班分けじゃんけんはいまだに終わらず、私た
ちは手持ちぶさたのままだつた。早く決まらな
いかなと待つていてる中で、渡辺くんが私に向
かつて手を合わせた。

「頼む、告白代行部につないでもらえないか
な？」

「……はい？」

あまりにも思つてもいなかつた言葉に、私は
少しひつくりして渡辺くんを見た。

窓を開けっぱなしにしているものの、まだ秋の気配とは程遠い、日差しがさんさんと降り注
いでいる。

空の色はすつかりと秋空なのに、気温はちつともおだやかにはなつてくれない。

* * * *

放課後、私は渡辺くんを連れて告白代行部の部室に向かうことになつた。
中等部の地下部室棟は初等部にはほとんど知られてないから、渡辺くんは素直に「すげえ」と喜んでいる。

「ここつて若王子は来たことあるの？」

「ないよ、若王子くんは私の部活にあんまり興味ないみたいだから」

「そうだよなあ、若王子、付き合い出すまで恋愛ギライにまでなつてたからなあ」

うんうんとうなづく渡辺くんに、私は思わず笑う。渡辺くんにまで、若王子くんがモテすぎ
るのが原因ですつかりかたくになつてしまつていたのは伝わつていたようだ。

それにしても、クラスメイトを告白代行部に連れて行くのは妙に新鮮な感じがする。



私は深呼吸して、とびらをコンコンと叩いた。

「ここにちはー、失礼しまーす。相談者連れてきましたー」

「はい、いらつしやい」

すでに来ていたさくらさんは、たぶん芽衣さん作のおかしを食べているところだつた。今日

持つてきていたのは焼きドーナツのようだつた。

花音さんはめずらしく、やる気なく机に突つ伏して寝ていた。

さすがに相談者が来たから、さくらさんが机を叩いて「こら花音、起きなさい」と起こした。

のそのそと起きはじめた花音さんの顔には顔に机のあとが付いている。

どうも花音さんは、修学旅行がイヤすぎてずっと調子を崩しているみたいだつた。

「はい、焼きドーナツと麦茶です。よろしかつたらどうぞー」

「ああ、すみません。俺甘いもの苦手なんで。でも麦茶はありがたくいただきます」

「そつかあ、残念」

芽衣さんはあつさりと焼きドーナツを引っ込めると、麦茶だけ渡辺くんに出した。

告白代行部に相談に来るのは、基本的に噂を拾いやすい女子が多いけど、たまに男子も来る。

とはい、クラスメイトをそのまんま連れてきたのは初めてだつたけど。

「それで、お名前とご用件を教えてください」

さくらさんにうながされ、渡辺くんは麦茶をひと口だけ飲んでから口を開いた。

「はい、更科のクラスメイトの渡辺です。実は……修学旅行中に高山に告白したくて、相談に

きました」

「高山さんに？」

「はい」

あれ、これ私が聞いてていいのかな。

少し顔を強ばらせていたら、トントンと芽衣さんが私の肩を叩いてくれた。手には渡辺くん

から回収した焼きドーナツがある。

「ちよつと奥にまで行く？」

「えつと……はい」

私たち部室の後方の席に座り直すと、もそもそと焼きドーナツを食べはじめた。

ふつうのドーナツは油で揚げているけれど、焼きドーナツはオーブンで焼いてある。そのせ

いか食感がケーキとドーナツの間みたいで面白いんだよね。

おかし上手の芽衣さんのつくつた焼きドーナツはもちろんおいしいけれど、知つている食感

よりも少しだけもつちりしていく、不思議。

「おいしいですけど……ふつうの焼きドーナツよりももつちりしていますね。ふんわりしてい

るのにもつちり？」

「えへへ、今日は豆腐ドーナツを焼いてみました。ふだんだつたら揚げてつくるんだけど、豆腐ドーナツって、揚げるとたまに爆発するから、今日は調子悪そうだなあと思つてオープンを使つたのです」

「なるほど……爆発したらそりや困る」

「ところで、高山さんつて莉子ちゃんの同じクラスの？」

「……はい」

「どんな子？」

「はい、大人しいけどいい子ですよ。図書委員やつてるんです。でも意外だなと思つました」

渡辺くんは若王子くんと同じく体育会系だ。

昼休みになつたらボールを持って校庭まで走つていき、ずっとバスケットボールをして遊んでいるような活発な子だ。昼休みになつたら図書館で委員会仕事をしながらカウンターで本を読んでいる高山さんを気にしているのは初めて知つた。

私は高山さんは名字が近いから掃除当番がいつしょになることが多く、よくおしゃべりするけど、渡辺くんとはだいぶ印象ちがうもんなあ。

私と若王子くんも無趣味と体育会系で、学校ではとことん相性が合わない。でも選ぶ映画や本の趣味は合うし、そもそも幼なじみだから共通の話題も多いけれど。渡辺くんと高山さんはどうなんだろうなあ。

そういうしている内に、話がまとまつたらしい。

「ありがとうございました、がんばります！あと更科！」

「は、はい！」

思わず立ち上ると、椅子がひっくり返る。私があわあわといすを起こそうとすると、芽衣

さんがかわりにひよいつといすを起こしてくれた。

「気にしなくつていいから」

「ありがとうございます……はい、渡辺くんに？」

「今日はここ連れてきてありがとな！」

渡辺くんはそう快活にあいさつを済ますと、颯爽と去つて行つてしまつた。

さわやかな子だなあと、ぼんやりと思つながら、私はさくらさんと花音さんの元へと寄つて

いつた。

「私はクラスメイトだから、あんまり聞いちゃダメかなと思つて離れてたんですけど……」

「今回は大したこと話してないから大丈夫よ。どちらかというと、相談できる相手が周りにい

ないから、ここで相談したかつただけみたいだからね」

「そうだったんですか……まあ、たしかに」

若王子くんは自分のことで相当周りに迷惑をかけた分だけ、恋愛に関しては口が重い。その

せいでの恋バナをできる限り耳に入れないようしているところがある。

他の男子はお調子者がすぎて、秘密の話をうつかり漏らしかねない。

だからと言つて女子も女子で「これはここだけの話だからね」っていう伝言ゲームで話が広

まつてしまことがある。

告白代行部では暗黙の了解として、ここで聞いた話は部室の外では話題にしないようにして

いる。

わざわざ来てくれた相談者に失礼があつちゃダメつてことだ。

私が納得している中、さくらさんは言つた。

「まあ、彼はうちをわざわざ利用しなくつても、その内告白できそな気はするんだけど。あ

れかしら。女子との距離感がわからないから、壁打ちに来たのかしらね」

「距離感、ですか？」

「女系家族の末っ子長男つてタイプにはたまにいるのよ。女子があまりにも話しかけやすい雰囲気だから、女子のグループにふつうに溶け込めるタイプの男子つて。でもねえ、それで距離感をまちがえると、サークルクラブシャーになつちゃうのよ。失恋したときとか、友だちとケンカしたときとか、弱つてはいるタイミングに優しくされると好きになつちゃうことつてあるでしょう？」

「それは……ものすつごく反応に困りますね？」

若王子くんはふつうに男系家族の子だし、男友だちと遊んでいるほうが楽な子だけど。

そういうことを平気でできてしまう人だつたら、たしかに困つてしまふかも。

渡辺くんの場合はどつちなんだろうなあ。

クラスでの渡辺くんの言動を振り返つていたら、花音さんは「逆に」と手をヒラヒラとさせ

さつきまでふてくされていたのに、ひさびさの相談者が来たせいか、いつもお調子を取り戻して

しているみたい。

「女子との付き合いがなきすぎて、女子を勝手に神聖化しそぎる人も困るからね。ちょっとしゃべつただけで、優しくされたつて舞い上がつてしまつタایプはたまにいるから。それは男女関係なくだけれど」

「はあ……それもまた、困りますねえ。渡辺くんはたぶん、どちらにも当てはまらないとは思いますけど……」

「でしようね。極端すぎる話だから。まあ、彼は大丈夫でしょう」
「たぶん渡辺くんは、また近い内に相談に来るんだろうね」ということで、今日の部活は終わつた。帰る準備をしていると――

「莉子さん」

「はい？」

さくらさんに呼び止められて、私は振り返つた。

「一応だけれど、渡辺くんのことはだれにも言つちやダメよ?」

「言いふらすような真似はしませんよ。渡辺くんの相手の高山さんも同じクラスですし」

「そうね。あと若王子くんにも言つたらダメだからね。莉子さんは人がイヤがるようなことはまず言わない子だけれど、念のために」

。

「わかつてますよ。私も言ふらして気まずい思いしたくありませんし。そもそも若王子くんに対して失礼ですか？」

「同級生間で気まずくなるのもそうだけれど。」

若王子くんが友だちとギスギスするのはイヤだなあと思つてしまつたんだ。

「相変わらず日差しが強い中、今日は体育委員が教壇に立つてゐる。窓を全開にしているのに、ちつとも風が吹かないから暑いまんまだ。」

「それじやあ、自分のやりたい種目をひとり三つ書いていつて。人数多い種目はじやんけんで決めるから！あと、運動部はリレーに全員参加だから、ホワイトボードまで来て。リレーの順番決めるから」

私は祈る思いで体育祭の希望種目を三つ選んだ。

運動神経がよくない人間は、とにかく目立ちたくないし、「お前のせいで負けた」みたいに言われたくないから、邪魔にならないところに参加する。

玉入れと綱引き、大玉転がしだつたら、痛くないし人数がたくさんいるから大丈夫だろうと、そこに名前を書いて提出した。

お願ひだからじやんけんにならないで。

そう祈つていたら「更科」と声をかけられた。若王子くんだ。

うちのクラスにはサッカー部が多く、リレー参加者もほぼサッカー部だ。サッカー部のメン

バーで順番を決めたらしく、若王子くんはアンカーになつたみたい。

私は「おお……」と声を上げる。

「すごいね、アンカー。がんばつてね」

「おう。それで更科はどれに希望出したの?」

「私は玉入れ、綱引き、大玉転がしに当たるといいなあと……」

「ふうん。借り物競走はなし?」

「あははははは……」

思わず笑つてしまつた。

借り物競走は、年の体育祭実行委員会によつて、内容がだいぶ変わる。

ものすごく杓子定規な子に当たつたのなら【帽子】【たすき】【鉢巻き】と、比較的客席に

「貸して!」と叫べばくれそなものを借り物にしてくれるけど……

愉快犯みたいな子に当たつたのなら【カツラ】【ハリセン】【ピコピコハンマー】など、正攻法では手に入らない受け狙いを仕込んでくる。

中には【好きな人】を入れて公開告白を迫つてくるような子もいるから、だれが体育祭実行委員会にいるか確認取れてない場合は参加したがらない子も多い。

私の場合は鈍くさいのを自覚しているから、受け狙いじやなくとも、まず勝てないからやりたくない。

「入れてないよ」

「ふうん。オレ、参加しようと思つてるんだけど」

「ひあ」

思わず変な声が出て、両手で口をふさぐ。

若王子くん、お付き合いはじめてから、いちいち爆弾発言してくるようになつたのはなんでなんですか。

私があわあわしていたら、若王子くんはあつさりと言つてのけた。

「但是他は棒倒しとか行こうかなと思つたけど、

棒倒しは逆に運動部入れないんだよな。『お前ら

がガチでやつたら怪我人出るからやめろ』つて』
「なるほど……」

棒倒しは力がふつうの子たちがやればそうでもないけれど、力の強い子たちががんばりすぎたらたしかに怪我人が出てもおかしくない種目だ。

若王子くんはいつものように、運動してないときはローテンションのままだ。

「それじゃあ、一応報告」

「う、うん？ ありがとう？」

若王子くんはさつさと自分の席に戻つていつたので、私はしきりに首をかしげていた。
なんでわざわざ自分の出る種目を教えてくれたんだろう？ 公開告白になつたら覚悟しておけつて宣言なのかな、単純に。

……応援してほしいからなのかな。

若王子くんの気持ちがさっぱりわからないと、私はただ首をひねつていた。
そうこうしている内に、体育祭の種目の割り振りが決まつた。幸いにも私は最初に書いた通りになつてくれたけれど。

私は体育祭の種目の発表を見ながら、頭の中で「おお」と感嘆の声を上げた。

借り物競走の箇所に、ちょうど渡辺くんと高山さんがいつしょに並んでいたのだ。渡辺くんは高山さんに告白ししようと、しょつちゅう告白代行部に話をしに来ている。

このふたりも上手くいくといいなあ。

そんなところに、思わぬ話が舞い込んでくるなんて、私は想像していなかつたんだ。

相変わらず空の高さだけは秋なのに、日差しはちつとも秋になつてくれない。
制服をパタパタあおぎながら、私は今日も地下部室棟に向かうところだ。
中等部校舎に行くため、花壇を横切ると、花壇にはリコリスやシユウカイドウが咲いているのが見える。用務員の白石さんが毎日世話をしている花壇は今日もキレイだ。
全然すずしくならないけれど、花壇だけは秋なんだなあとぼんやりと思つていると、花壇の周りをうろうろしている子を見つけた。

「その子は私と目が合うと、『あつ、あのう！』と声をかけてきた。
「告白代行部つてどこか知りませんか!?」

「はい？」

どうも告白代行部を探して花壇をうろうろしていたみたいだ。ポニーテールの活潑な子で、制服の下にハーフパンツを穿いてる。男子といつしょに校庭で走り回っている女子は、よくそろっているから、彼女もその手の子なんだろう。

私も花壇前のベンチで途方に暮れていた時に告白代行部のことを教えてもらつたから、この子も白石さんあたりに教えてもらつたのかもなあ。

私はそう思いながら、彼女を告白代行部へと連れて帰つた。

部室に入ると、芽衣さんがレモンケーキ……芽衣さん曰く「ウイークエンド」と言われる名前のパウンドケーキなんだとか……と紅茶をふるまつていたところだつた。紅茶の匂いが強いから、今日は私が来るまでに相談者が来ていたらしい。

「あのう、私は六年D組の早見美奈子と言います。今度の体育祭に合わせて、告白代行を頼みたいんですけど、大丈夫ですか？」

「はい、早見さんね。相手はどこのだれかお伺いできますか？」

さくらさんは美奈子さんの前に座りながら話を聞いている。

芽衣さんがおかしを出している一方で、花音さんはさらさらと便せんになにかを書いている。

たぶん前に来ていた子たちのラブレターの代筆だろう。

さくらさんはうながされ、美奈子さんはもじもじと膝を揺らしてから、口を開いた。

「同じ学年の……渡辺雅人くんです！」

……うん？

私は思わずこわばつた。

それ、うちのクラスの渡辺くんのフルネームだ。美奈子さんは同じクラスじゃないけど同じ六年生だ。さすがにうちの学校には同姓同名はいなかつたはず。

私はどうしようど、視線をおろおろとさまよわせていたら、「莉子ちゃん莉子ちゃん」と芽衣さんに呼ばれた。

私がうろたえたまま、芽衣さんに「はい」と答えるとウイークエンドをひと切れ差し出され

た。

「まずは落ち着いて」

「はい……」

ひと口頬張ると、ウイークエンドの優しい甘さに、レモンの香りがふわりと漂う。その味で少し落ち着いてから、私はちらちらとさくらさんを見た。

さくらさんは美奈子さんと数回会話をしてから、美奈子さんが元気よく帰つて行くのを見守つた。それから、ようやつとこちらにやつってきた。

「さすがにこれ以上は体育祭での告白代行は無理ね。私たち四人しかいないのに、分担するに

しても多すぎて無理。今後は体育祭以降の告白代行だけ相談に乗つてあげて。あと莉子さんも、顔に出さないでよく逃げました。芽衣もありがとう、莉子さんにおかし出して落ち着かせてくれて」

「はーい」

相変わらずのマイペースな芽衣さんの返事を聞きつつ、私は「あのう……」と声をかけた。

「これつて、どうすればいいんでしよう。どちらも告白代行の相談者になつちやつたつて話なんですけど……」

渡辺くんも美奈子さんも、相談者になつてしまつたら、どうすればいいのかわからない。

それでもさくらさんの態度は変わらなかつた。

「こういうことつて滅多にないんだけどね。ない訳じやないから」

「い、いいんですかね、こういうのつて」

私たちもすでに渡辺くんがだれを好きかを聞いている。

美奈子さんは本気でなにも知らないで告白代行を頼みに来ちゃつたのだ。

これ、そのまま依頼を受けるのはフェアじゃないんじや……

どちらも私が声をかけられて連れてきてしまつた手前、いたたまれなくて震えるしかない。

すると、静かにラブレターの代筆をしていた花音さんが口を挟んできた。

「不幸な事故は、いちいち気にしなくつていいと思うけど」

「そ、そうなんですけど……納得できないと言いますか、すわりが悪いと言いますか……つ」

私は抗議するものの、花音さんは淡淡と言う。

「好きになつた人が自分のことを好きだつていうの、本当に奇跡だと思うよ。好きでもどうしようもないことつて、ふつうにあるから」

「……まあ、そうですね?」

たしかに、今までもそういう後味の悪いことはふつうに遭遇している。

好きな子がアイドルになつてしまつたがために、音信不通になつてしまつたとか。初等部の子がひとりで中等部に来るのは危ないから、同じ校舎に入れるようになるまで無視をし続けるとか。そもそも婚約者なのに、年の差が原因でそれちがつてゐるとかもあるんだから、告白したらそのまま受け入れるほうが稀なんだろう。

でも。私があれつ？と思つたのは、花音さんの言葉だつた。

私が知つてゐる限り、告白代行部の中で唯一花音さんからだけ、浮いた話を聞いたことがなかつた。

芽衣さんは同じ学年の武道家の佐賀見くんにしょつちゅう彼をつくては、それを食べに來ている彼にふるまつてゐる。ただ、佐賀見くんから告白しない限り进展がないだろうと、私たちちはそれを遠巻きに眺めている。

さくらさんに至つては現在高校生の婚約者がいる。休みの日にデートに行くくらい仲がいい人だから、たぶん結婚適齢期になつたら結婚するんだろうと思つておもひ。

花音さんはそういう話を一切聞いたことがなかつたから、てつきりそういうのに興味がないのかと思つてゐた。

修学旅行に行くのを本音でイヤがつてゐたのに加え、今回の発言があ。

花音さんについては、同じ部活にいながらもなかなか知らないことも多いなと思つてしまつた。

さくらさんはなにかに氣付いたらしく、花音さんのそばに寄つていつて「えいっ」とデコピンをした。

「いた
痛い」

当然ながら花音さんはムツとした顔をしたもの、さくらさんはどこ吹く風だ。

痛くしたの。あと花音、あんまり意地悪言つたらダメでしょ。それは美奈子さんにも、莉子さんにも、ふつうに失礼だからね

「……」めん

「い、いえつ」

私が慌てて手を横に振ると、さくらさんは話をまとめた。

「とりあえず。このことはこの場限りの話にしておいてね。特に莉子さん。今回はクラスメイト関連の話で心苦しいだらうけれど、我慢してね

「わかりました……つ！」

私も一度、自分の恋で遊ばれてしまつたことがあるし、そちら側には回りたくないもんなんあ。私は勢いを付けて返事をしてから、ウイークエンドを平らげた。ウイークエンドの優しい甘さと、紅茶の後味を引く渋みはよく合つた。

最近、わたしと若王子くんはいつしょに帰つていてる。

元々私たちは幼なじみだし、ご近所付き合いもあつた関係だ。当然帰る方向は同じだし、付き合うまでもたまたま同じ時間に会えたらそのままいつしょに帰つていたけれど、今はちゃんと待ち合せをしている。

サッカー部も今は大きな大会はひと区切り終えているから、練習試合中心でそこまで忙しくないらしい。

私は待ち合せしている駐輪場に向かうと、「あつ、更科」と声をかけられた。

「ちょうどユニフォーム姿の若王子なんだ。

「部活お疲れ様」

「よつす、そつちもお疲れ

最近は日が落ちるのが少し早くなってきたから、若王子くんがいつしょに帰つてくれるのを見えない。それでも外灯はボツンボツンとともにいる。安心だ。私と並んで帰るときは、若王子くんは自転車から降りて、私のカバンを自転車のカゴに入ってくれる。

自転車を押しながら、ふたりでいつしょに歩く。空は少し暗くなっているものの、月も星もまだ見えない。それでも外灯はボツンボツンとともにいる。

話題はもっぱら体育祭と修学旅行の話だ。

「もうすぐ体育祭の練習がはじまるなあ」

「そうだねえ。若王子くんずっと活躍するじゃない」

「そうかあ？ 運動部はサッカー部だけじゃないし。他のクラスに陸上部だらけのところもあるから、あいつらに勝てないとなあ」



「陸上部に勝つのは、さすがに難しいんじゃないかなあ」

「陸上部の子たちは、本当に足から生まれてきたんじやないかつてくらいに足の速い子ばつかりで、勝てるイメージが全く湧かない。私がそう言うと、若王子くんは少しだけムスッとした。

「オレだつて勝てますけど、陸上部に？」

「そうだね、アンカーダもんね……がんばつてほしいけど、ケガは気を付けてね」

「おう。ああ、そういうえば」

若王子くんがふいに話を変えてきた。

「最近雅人がふわふわしてる。こそばゆいというか」

私は表情出していないかと、自分の顔の筋肉を気にした。

そうだ、若王子くんと渡辺くんはふだんから仲がいいんだから、渡辺くんになにかあつたらふつうに若王子くんだつて気付くんだよなあ。

「そうなんだ？」

声がひつくり返つて悟られないかなとヒヤヒヤした。私はウソが苦手だから、相談者のこと

を守るためにはとぼけきるしかない。

「おう。あいつあんまり本読まないので、ずつと図書館に通つて歴史マンガ読んでる」

「……歴史の成績よくなりそうだねえ」

私がすつとんきようなことを言つて視線をそらすと、若王子くんは、「ふう」とため息をついた。

「更科、お前んとこの部に雅人通つてるだろ？」

「なつ、なんでつ!」

思わず聞いてしまい、内心「しまつた」と両手で口を押さえる。私の反応を見て、若王子くんはふたたび「ふう」とため息をついた。

「いつたい何年いつしょにいとと思つてんだよ。更科はわかりやすいからわかるよ」

さくらさんに「絶対にだれにも言つてはダメ」と言っていたのに、私のうかつさのせいで

早くも若王子くんにバレちゃつた。

私は「あーあーうーうー……と言葉にならない声を上げている中、若王子は「まあ、その

辺で」と私の奇声を止めた。

「お前んとこの部でなにをどう相談してるかまでは聞かないけど……あいつは距離感まちがえ

やすいから、なにごともないといいな」

若王子くんが言つてゐるのは、ちょうど前にも花音さんも指摘してゐたことだ。

若王子くんの場合は、あまりにもモテて告白されまくつてゐたとき、相手のことを気遣つて、完膚なきまでにフツっていたのが原因で、周りからのブーリングがひどかつたんだ。

一方の渡辺くんは、人懐つこい性格が原因で、少しまちがえると八方美人にも見えてしまうんだ。渡辺くんの人当たりがいいつてことなんだろうけど、本命以外からモテても困るよね。

周りから勝手にひどい男扱いされるのと、周りから勝手に八方美人扱いされるの。

どつちのほうが幸せなんだろうなあ。

そこまで思い返して、私はボツリと漏らした。

「こういうのつて、ふつうはキセキつて言うんだよな」

「好きな人が自分のことを好きつて、すごく貴重なことだよね……」

それに若王子くんは「おう」と大きくうなづいた。

「おなじことを、部活中に花音さんも言つていた。

私たちちは、大人と比べれば大した時間生きてないけれど、自分が好きな人が自分のことを好きつてゐるのは、滅多にないことだつて、もう思い知つてゐる。

だれかがだれかを好きになり、好きな相手同士が両思いだつたらいいよねつて話なのに、どうしてこうも難しいんだろう。

「……渡辺くんが上手くいくよう、祈つてね」

「別に雅人は大丈夫だろ。本当にダメそだつたら、いつしょに部室に遊びに行くから」

「うん、そうしてね」

結局はそういう、ふわつふわしたことしか言えなかつた。

告白代行部は、あくまで告白代行までしかできないから、せいこう・失敗は関係ない。それでも、

いつだつてわざわざ相談しにやつてきてくれた人の恋愛成就を願つてゐるのにね。

私が勝手に胃を痛めている間に、時間は経過する。

その日は、修学旅行係で居残つて、修学旅行のしおりをつくつてゐた。地図はスマホでも見られるけれど、ざつくりと目的地をたしかめるにはどうしても紙のしおりが必要だ。先生が用意してくれた紙に加えて、修学旅行係の会議で取り決められた紙もセットにして冊子にする。

わざと渡辺くんはしおりを一生懸命手折りしては、大きめのホツチキスで留めていた。
「えつ？」 そうだね

渡辺くんは気のせいか、少し浮かれているみたいだ。私にとつてはゆううつな体育祭だけれど、運動部や体力自慢の子たちは、比較的の楽しみにしているようだつた。

うちの学校では初等部は初等部だけ、中等部と高等部は合同で体育祭が行われる。有名メー カーがおかしや軽食の屋台を出すから、家族の応援に来た人にもおおむね好評だつた。本当に 疲れたときには、屋台でアイスを買って食べられるのはうれしいよね。
とはいえ、運動神経がない人間からしてみたら、いかに風邪を引いて休むかばかり考える日 だし、渡辺くんほどニコニコできない。しかも今回は、告白代行をたくさん抱えているから、 四人で手分けしないと間に合わない。ふだんだつたら行きたくない体育祭でも休む訳にはいか ないんだ。

パチンパチンとホツチキスでしおりを留めながら、渡辺くんは言つた。

「そういえば、更科はどうに出てるんだつけ？」
「目立たないように、綱引き、玉入れ、大玉転がしだね」

「ああ、定番。あとさ、今回はフォーケダンスあるからさあ

「あー……」

それは忘れてたなあと、私は今更ながら思う。フォーケダンスはよくある、男女別に輪になつて踊り、一回踊るごとに相手を交替していくというやつだ。私はペアの順番が、身長順でも、名前順でも、どうがんばつても若王子くんとは踊れない。だから、「フォーケダンス面倒くさいなあ」くらいにしか思つていなかつた。
でも渡辺くんはちがうか。高山さんの身長は比較的高めで、渡辺くんの身長は男子の真ん中くらい。ふたりの身長は近く、順番によつては高山さんと踊れる可能性があるんだ。

「いいなあ」

私が言うと、渡辺くんはニコニコと笑う。

「うんつ、楽しみにしてるんだ」

あまりにもくつたくない笑顔。たぶんこういうのが好きな子もいるんだろうなあと思う。私はしおりを折りながら、キヨロキヨロと辺りを見回す。

もう放課後だし、グラウンドには野球部のかけ声がひびいてる。廊下は今はだれもない。基本的に告白代行部の内容は、よつぼどのことがない限り、外に持ち出すことはしないけれ

ど。今だつたら相談者とふたりつきりだから大丈夫だよね。

私は何度も確認を取つてから、やつとのことで口を開いた。

「でもそこまで元気に女子としゃべれるんだつたら、告白代行つて必要なくないかな」

そりや、私たちでしゃべれる練習をする分には、いくらでもしてくれてかまわないけれど。

元々しゃべりやすい雰囲気だつた渡辺くんは、告白代行部に通いはじめてから、少しづつ女子との距離感が正されているような気がする。この分なら、私たちがわざわざ告白代行をしな

くつてもいいんじゃと思うんだけれど。

私のボロリと言つた言葉に、渡辺くんは「うーん」と腕を組んだ。

「若王子もだけどさ。女子にかんちがいさせるのは、困るよなあと思つて。オレが今、更科と

ふつうにしゃべれるのは、更科がすでに若王子と付き合つているからだつて思うし」

「うん」

「女子と男子がしゃべつてただけで、勝手にかんぐる奴つているからさあ……それが原因で高山

さんに誤解されるのは、やつぱり怖いよ」

「なるほど……」

高山さんは、私が知つてゐる限りは、いわゆる恋に恋するタイプではない。たしかに読書は

好きみたいだけれど、現実と本の中をいつしょくたにはしない。だからなんでもかんでも恋愛に結びつけるような真似はしないとは思う。

でも、渡辺くんが気にする程度には、なんでもかんでも恋にこじつけてしまう子は多い。

若王子くんの場合は勝手に期待されて、勝手に怒られてたな。好きじやない相手に誤解されないようかんぶなぎまでにフツっていたのは若王子くんなりの優しさだつたんだと思う。渡辺くんの場合は似たようなものを感じる。

「じゃあ高山さんへのアピールがんばつてね。私も応援してたから」

「うん？ ありがとう！」

そうニカツと笑う渡辺くんを見て、内心美奈子さんのことと思つた。

彼女の件は、私は一切関わらないと決めてるし、さくらさんも渡辺くんと同じクラスの私がすべきじやないだろうと判断してか、美奈子さんの告白代行についての情報を回してこない。好きな子に告白したら、実は自分のことを好きだつたなんて話、本当に滅多にないんだ。